



子ども主体で リアルに向かう

「新潟県いじめ等防止のための資料集」作成委員 橋本 定男

本事例集は、いじめの早期発見、未然防止、対応と再発防止など、いじめ問題対応のプロセスからネットいじめやケーススタディ、人権教育等々までカバーし、現場の喫緊のニーズに応えようとするものである。委員としてかかわってよく感じたことは、何としても実効性あるものにしたいという思いである。また、作成スタッフは応用の効く事例や提言を目指す、文の行間に各人の個性や信条がみえることである。人間が出る。いじめに取り組むとはそういうことだと納得する。

さて、ここでは担当した「いじめの未然防止」を取り上げる。委員会でも発言したが、いま強く思うことを述べたい。それは、防止するための方策をつくる、また具体化し実践を進める、そのときにしっかり自覚したい、2つのことである。1つはいじめ問題のリアル、1つは実践の主体についてである。

いじめ防止の基本は「やるべきことをやる」、基本中の基本だ。しかし、自覚としてはこれで半分である。もう半分ある。その半分をつなげるとこうなる。

やるべきことをやる。“それでもいじめ問題は起こる。”

それでも起こる、これがいじめ問題のリアルである。リアルに向かう自覚がある。「やるべきこと」に加えて、それでも起きる想定で「さらなるやるべきこと」を策定する、そこまで踏み出したい。未然防止策は、次のような足し算になる。

(やるべきことをやる) + (それでも起こる。そう想定し、さらに〇〇をする)

問題は、基本の「やるべきこと」が適切か。そして、従来が基本で終わっているならなおさら、1歩踏み出した「さらに〇〇をする」の内実があるか、である。

本事例集は「さらに〇〇をする」の参考になるはずだ。例えば、子どもが目標を共有し協力して生活を向上させていく取組がある。それをやればよしとせず、節目で現状を点検する場面を設定している。ポイントになる。が、その先がもっと大切だ。点検結果を「見過ごせない、よくない実態が起きている」と想定し、対策を打つのである。リアルに向かい「さらに〇〇をする」にあたる。やるべきことをやっても不合理や不公平を含む負の課題が生まれるリアルに正対したい。

ここで、もうひとつの未然防止にかかわる大切な自覚を考える。

上記の課題解決の主体はだれか。いじめにつながるかもしれない状況を改善する主体はだれか。子どもだ、言うまでもなく...か？実際に？生活上のリアルな問題に向かう子ども主体の実践を組織する自覚である。これを問いたい。大丈夫か。

むろん状況の質、重大さによるし、いじめ問題化したら教師主導になる。大

切なのはふだんの生活である。トラブルや言葉づかいなど問題が次々と生じてくる。これが生活のリアルだ。その問題解決の主体を子どもにし、危機に主体的に向かう「訓練」をしているだろうか。適切な範囲において、子どもが生活上の課題に正対する場をつくり解決する体験を積み重ねていくことで、状況がいじめ問題にまで悪化する以前に、いじめの芽を子どもが摘み取ることができる。これこそが、『最強の未然防止策』ではないだろうか。

子ども主体のリアルな諸問題を解決する実践を進める上で必要なことがある。子どもを信じることである。それが弱いと自覚が弱くなり、実践が弱くなる。いじめ防止の取組の深部基底は、子どもを信じることである。